

Predicational *It* Clefts と Proverbial *It*-Clefts*

熊本千明

Predicational *It*-Clefts and Proverbial *It*-Clefts

Chiaki KUMAMOTO

要 旨

WH 分裂文が指定と措定の解釈をもつことは良く知られている。例えば、*What the jewel thief did not steal was worthless jewelry* (Declerck 1988: 149) は、宝石泥棒は何を盗まなかったかということ、価値のない宝石をだった、という指定の解釈と、宝石泥棒に盗られずに残った宝石は価値がない、という措定の解釈の両方が可能である。他方、*it* 分裂文は、通常、指定の解釈がなされる。しかしながら、Ball (1977)、Declerck (1988)、Hedberg (1990、2000)、Patten (2012) らは、*It was an INTERESTING meeting that you went to last night* (Declerck 1988: 166) のような predicational *it*-cleft や、*It is a long lane that has no turning* のような proverbial *it*-cleft (Prince 1978) の例を取り上げ、*it* 分裂文が措定の解釈をもつ場合があることを論じている。本稿では、これらの議論をもとに、*it* 分裂文の措定の解釈はどのように説明できるのか、考察する。

措定の解釈をもつものとして取り上げられる *it* 分裂文のタイプは、さまざまである。Declerck (1988) が議論の対象とした predicational *it*-cleft、一般に proverbial *it*-cleft と呼ばれるものの他に、それほど定式化していないが、proverbial *it*-cleft と類似した特徴をもつ、less proverbial *it*-cleft (Declerck 1988) (e.g. *It is a good divine that follows his own instructions*) がある。これらの *it* 分裂文は、指示的名詞句の指示対象に属性を帰す、措定文であると考えべきであろうか。それとも、値を示す焦点名詞句の叙述的 (predicational) な情報に重点が置かれるという特徴はあるものの、本質的には、指定の機能をもつ通常の *it* 分裂文と統一的に説明することが可能であろうか。

it 分裂文の意味構造、統語構造については未解決の問題が多い。コピュラ文の指定と措定の解釈の違いを考える際には、名詞句の指示性に関する考察が不可欠であり、代名詞 *it* が指示的であるのかどうかという点について、検討する必要がある。また、前提を表すとされる WH 節が、*it* を先行詞とする関係節であるのか、直前の名詞句を先行詞とする関係節であるのか、それとも、外置節であるのか、という問題も考えなければならない。すべての問題をここで扱うことはできないが、指定の *it* 分裂文の主語代名詞 *it* に関しては、

非指示的であると考えた立場をとる。その上で、*it* 分裂文がもつとされる措定の解釈を、焦点名詞句が表す意味情報の特殊性によって説明する可能性を探る。*it* 分裂文が措定の解釈をもつとされるのは、値がどれであるかということではなく、どのような性質をもつものであるか、ということ指定する場合であり、WH 節の意味内容との関連においてその性質が際立つ場合である、と考えることによって、説明できるケースがあるのではないかとと思われる。

【キーワード】 *it* 分裂文、*th* 分裂文、predicational *it*-cleft、proverbial *it*-cleft、less proverbial *it*-cleft、(倒置) 指定文、措定文、指示的名詞句、叙述名詞句、変項名詞句

1. 序

まず、これまでに議論の対象となってきた分裂文にはどのようなタイプがあるのか、見ておくことにしたい。指定の読みをもつとされるものと、措定の読みをもつとされるものとに大きく分けて、以下に示すことにする。指定の分裂文は主語名詞句が単数であるのに対し、措定の分裂文には複数形の主語が現れるという特徴がある (Ball 1977、Hedberg 1990、2000)。

(1) 指定の解釈をもつとされるもの

a. It was John that I saw. (*it* 分裂文)

b. What John is is proud. (WH 分裂文) (Higgins 1979: 8)

c. This/That was John that I saw. (*th* 分裂文)¹

(2) 措定の解釈をもつとされるもの

a. It was an INTERESTING meeting that I went to last night. (predicational *it*-cleft)
(Declerck 1988: 166)

b. It is a poor heart that never rejoices. (proverbial *it*-cleft)

c. It is a good divine that follows his own instructions. (less proverbial *it*-cleft)
(Declerck 1988: 151)

d. What John is is worthwhile. (WH 分裂文) (Higgins 1979: 8)

e. Those are real eyeglasses that Mickey is wearing. (*th* 分裂文) (Hedberg 2000: 917)

f. That's a nice shirt that you are wearing. (*th* 分裂文)

指定の解釈は、変項を埋める値を指定するという読みであり、措定の解釈は、主語の指示対象について属性を帰すという読みである。これまでの議論においては、*it* 分裂文の指定と措定の解釈を区別する際に、その判断の根拠が明確にされていない場合も多かった。本稿では、措定の解釈をもつとされる *it* 分裂文の中、特に、(2a)、(2b)、(2c) のタイプに注目し、それらが指定の解釈をもつ *it* 分裂文とどのような点において異なるのか、考察する。

指定と措定の区別を説明するには、コピュラ文の中の名詞句の意味機能を把握することが肝要である。西山 (2003、2013) に従って、A は B だ / B が A だ、A is B / B is A の形式をもつ措定文 / predication sentence と (倒置) 指定文 / (inverted) specificational sentence² の規定を、次のように考えることにしよう。

- (3) 措定文: A の指示対象について、属性 B を帰す。A は指示的名詞句、B は叙述名詞句。
(西山 2013: 160)

a. John is a teacher. ジョンは教師だ。

b. John is the acme of courtesy. ジョンは、礼儀正しさの極致だ。(Declerck 1988: 57)

- (4) (倒置) 指定文: A が表す命題関数 [...x...] における変項 x を満たす値 B を指定する。A は変項名詞句、B は値名詞句。
(西山 2013: 161)

a. The murderer is Jones. / Jones is the murderer. 殺人犯はジョーンズだ。 / ジョーンズが殺人犯だ。

b. The leader is that man over there. / That man over there is the leader. リーダーは、あそこにいる男だ。 / あそこにいる男がリーダーだ。

この規定によれば、措定文の主語名詞句は指示的名詞句であるのに対し、倒置指定文の主語名詞句は、非指示的な、変項名詞句であるという大きな違いがあることが分かる。また、措定文の述語名詞句は叙述名詞句であるのに対し、倒置指定文の述語名詞句は、指示的名詞句やその他、値となるような様々な種類の名詞句である。こうした措定文、(倒置) 指定文の意味構造を考えると、*it* 分裂文の措定と指定の解釈の違いを考える際にも、代名詞 *it* が指示的であるか否か、という点に関する考察が重要であることが理解できる。

it 分裂文における代名詞 *it* の指示性の議論は、分裂文の統語構造をどのように捉えるかという問題とも関連している。これまでに提案されてきた *it* 分裂文の統語的な分析法には、主として、extraposition approach と呼ばれるものと、expletive approach と呼ばれるものがある。前者は、Jespersen (1927) に、後者は、Jespersen (1937) に、その初期の例が見られるものである。それぞれの分析は、以下のように示される。

- (5) The extraposition approach

It* was CLINTON *who won (Hedberg 2000: 907)

- (6) The expletive approach

[It was] CLINTON [who] won. (Hedberg 2000: 909)

(5) においては、WH 節が主語節であり、それが文末に移動したと考える。WH 節は関係節であり、直前の焦点位置の要素ではなく、不連続に文頭の *it* を修飾する。この分析は、*it* 分裂文を specificational sentence の構造と関連づけるものである。これに対し、(6) においては、焦点位置の要素と WH 節は、文としての構造関係 (*Clinton won*) をもつと考える。代名詞 *it* や、*be* 動詞、関係代名詞は、expletive なものとみなされる。この二つの分析法に加え、Hedberg (2000)、Reeve (2012、2013) らの新たな提案がある³。両者は、*it* 分裂文

の主語名詞句 *it* は意味的に空ではないとして、expletive approach を退け、さらに、WH 節は統語的には焦点位置の名詞句を修飾するのであって、*it* を修飾するものではないとして、extraposition analysis も退ける。しかしながら、意味的には、*it* と WH 節は結びついて不連続の確定記述をなすとみなし、*it* 分裂文は、意味上、specificational sentence (*The one who won was Clinton*) と同等であるとする立場をとる。

ここでは、統語構造について立ち入ることはしないが、いくつか注意しておきたい点がある。まず、*it* 分裂文における *it* の指示性に関して、Hedberg (2000)、Reeve (2012、2013) の言うように、*it* は expletive でないとした場合でも、そのことがすなわち指示的であるということを示すのかどうか、定かではない。次に、specificational sentence としての意味構造をもつと考える際、*it* と変項を含む WH 節とが結びついた主語を、指示的であるとするのには、問題がある。Hedberg (2000) は、(2e) のような措定の解釈をもつ *it* 分裂文については、主語の代名詞は、複数になることから、個体タイプ $\langle e \rangle$ 、焦点要素は述語タイプ $\langle e, t \rangle$ であり、他方、指定の解釈をもつ *it* 分裂文については、主語は常に単数であることから、述語タイプ $\langle e, t \rangle$ 、あるいは、一般量化子 $\langle \langle e, t \rangle, t \rangle$ 、焦点要素は個体タイプ $\langle e \rangle$ であると考えている。そして、措定と指定の分裂文は、意味構造上、逆 (reverse) の配列をもつものであるとみなし、両者を統一的に捉えることができるのが、彼らの分析法が expletive approach に勝る点であると述べている。しかし、先に見たように、西山 (2003、2013) の規定によれば、倒置指定文 / specificational sentence の主語名詞句は、非指示的な、変項名詞句である。これは、措定文の述語位置に現れる叙述名詞句とは性質を異にするものであり、したがって、倒置指定文 / specificational sentence は措定文を倒置した構造をもつものである、と考えることはできない (c.f. 熊本 2014)。次の例を見よう。倒置して (8) の形にできるのは、(7b) の inverted specificational sentence / 指定文であり、(7a) の措定文ではないことに注意しなければならない。

- (7) a. The best student is the leader. 一番できる学生は、リーダーだ。(指定文)
b. The best student is the leader. 一番できる学生が、リーダーだ。
(inverted specificational sentence / 指定文)
- (8) The leader is the best student. リーダーは、一番できる学生だ。
(specificational sentence / 倒置指定文)

指定の *it* 分裂文の主語代名詞 *it* は expletive ではないと主張した上で、Reeve (2013) は、さらに、*it* 分裂文を動詞文と対応させる expletive approach には、指定の機能に結びつくと言われる前提や総記といった特徴が説明できないという欠点があると言う⁴。

- (9) a. *It was NOTHING that he drank.
b. *The thing that he drank was nothing.
c. He drank NOTHING. (Reeve 2013: 171)
- (10) a. It was ??also/*even THE SHERRY that John drank.

b. The thing that John drank was **also/*even* the sherry.

c. John *also/even* drank THE SHERRY. (Reeve 2013: 171)

しかしながら、実際には、分裂文が示す総記の効果は、含意 (implicature) に過ぎないものである (cf. Horn 2016)。

(11) A: It's PRESIDENT BUSH who's responsible for the abuse at Abu Ghraib.

B: Yes, you're right—Bush, and Cheney, and Rumsfeld. (Hartmann & Veenstra 2013: 23)

(12) A: It's ONLY PRESIDENT BUSH who's responsible for the abuse at Abu Ghraib.

B: #Yes, you're right—Bush, and Cheney, and Rumsfeld. (Hartmann & Veenstra 2013: 23)

本稿では、統語構造に関して、特に、どの分析方法を支持する議論も行わないが、以後、*it* 分裂文の指定の解釈を示す際には、動詞文を対応させることにする。それは、上で見た通り、コピュラ文で示そうとすると、どの解釈が意図されているのか、曖昧になるという理由からである。

II. 分裂文の主語代名詞の指示性

Hedberg (2000)、Reeve (2012、2013) は、指定の *it* 分裂文の主語代名詞 *it* が expletive ではないということを示すために、以下のような例を挙げる。分裂文には、*it* / *this* / *that* いずれも現れるが、expletive であるとされる用法、例えば、繰り上げ構文の主語の *it*、天候の *it*、外置構文の主語の *it* の場合は、*this* や *that* が代わりに現れることはない。expletive ではありえない *that* や *this* と共に用いられるということは、分裂文における *it* が expletive ではないことを示していると、Hedberg (2000)、Reeve (2012、2013) は考える。

(13) a. It / *this* / *that* was John that I saw.

b. It / **this* / **that* seems to me that you're wrong.

c. It / **this* / **that* is snowing.

d. It / **this* / **that* was clear that we were wrong. (Reeve 2013: 167)

このことは確かに、指定の *it* 分裂文における主語代名詞 *it* の用法が、expletive としての用法とは異なるということを示すかもしれないが、先にも述べたように、そこから、即、この *it* が指示的であると結論づけるのは早急である。彼らの議論においては、「指示性」の概念をどのように捉えるのか、明確にされていない点が問題である。*it* 分裂文の代名詞 *it* が世界の中の対象を指示しているのではない、ということは理解されていると考えて良いのであろうか。

Mikkelsen (2005) は、(14a)、(14b) のような、主語位置に指示詞の *that* や *it* が現れる「切断分裂文」(truncated cleft) と、(15a)、(15b) のような完全な形の分裂文とは類似性を持ち、いずれも specificational sentence の下位区分であるとみなす立場をとる。

(14) a. That's Susan.

b. It might be my best friend. (Mikkelsen 2005: 118)

(15) a. That's Susan who's knocking on the door.

b. It might be my best friend who had the accident. (Mikkelsen 2005: 120)

Mikkelsen は、specificational sentence を措定文と関連づけ、措定文の述語の位置にある名詞句が主語の位置に繰り上げられたものが specificational sentence であると考え、specificational sentence である (16a) の付加疑問において *it* が用いられることは、その先行詞である主語名詞句 *the tallest girl in the class* が指示的名詞句ではなく、性質を表す (property-denoting)、非指示的な名詞句であることを示していると、Mikkelsen は言う。

(16) a. The tallest girl in the class is Molly, isn't it?

b. The tallest girl in the class is Swedish, isn't {she / *it}? (Mikkelsen 2005: 64)

そして、specificational sentence の主語名詞句が性質を表すのに対し、完全な形の分裂文、切断分裂文における主語代名詞が表すのは、性質の変項 (property variable) であって、主語代名詞は、完全な形の分裂文においては WH 節を後方照応詞し、切断分裂文においてはコンテキスト内で際立つ性質を前方照応すると考える。先に述べたように、specificational sentence を措定文の倒置と見なすのは問題があるが、その主語名詞句を非指示的であると指摘している点は注目に値する。

他方、Birner et al. (2007) は、彼らのいう 'equative sentence' (等価文)⁵ の主語名詞は、指示的であるとし、開放命題の変項の例示を指示する場合と、個体を指示の場合があると論じている。例えば (17) の召使いの発話は、開放命題 (OP: open proposition) が想定できるときは (18a)、想定できないときは (18b) の解釈をもつ。*that* の指示対象は、前者の解釈においては、変項の例示であり、後者の解釈においては、その料理であるとされる。

(17) [King dips his finger in a bowl held by a servant and then licks the food off his finger and proclaims it delicious.]

King: What do you call this dish?

Servant: *That would be the dog's breakfast.* (Birner et al. 2007: 329)

(18) a. We call this dish the dog's breakfast. (OP: 'YOU CALL THIS DISH X')

b. That dish is the dog's breakfast.

(19) のような *th* 分裂文において、単数の代名詞 *that* の使用が可能なのは、個体ではなく、開放命題の変項の例示を指示しているからであると、Birner et al. (2007) は言う。

(19) A: Is it true that the officials who are resigning are the President and the CEO?

B: No, *that's the top three members of the Board of Directors who are resigning.*

OP: 'THE OFFICIALS WHO ARE RESIGNING ARE X' (Birner et al. 2007: 332)

ここでは、*that* を指示的であるとしながらも、個体指示の場合と、開放命題の変項の例示を指示する場合とを区別している点に注意しよう。さらに、Birner et al. (2007) は、分裂文における *it* と *that* の指示性の違いに言及し、*it* は通例、非指示的であると考えられるのに

対して、*that* は指示的であると強調している。指示性の概念が明確にされていないのは問題であるが、*it*、*that* の相違を、単に、聞き手の意識に上っているか、どのくらい顕著であるか、などの情報構造上の違いとみなす Hedberg (2000) とは異なる主張をしているのは、興味深い。

実際、以下のような例を見ると、*it* 分裂文と *that* 分裂文とでは、値の対比や、付加に関して、容認度が異なることが分かる。

(20) As you asked me, I've been checking the list of club treasurers. It / ?That is John, certainly, who managed the club's accounts in 2017, but look, it / ?that is Mary who did it in 2018.

(21) A: Bill danced with Mary.

B: No, it was Sam that danced with Mary.

C: It was also John that danced with her. (Hedberg 2013: 243)

(22) A: Do you remember who danced with Mary? Was that Bill who danced with Mary?

B: No, that was Sam that danced with Mary.

C: *That was also John that danced with her. (Kumamoto 2012: 45)

また、*it* 分裂文と *that* 分裂文は、スコープの解釈についても相違が見られる。(23) の *it* 分裂文は、それぞれの犬が異なるチキンを食べた、という解釈をもつが、(24) の *that* 分裂文においては、その解釈はさほど容易ではないようである。

(23) It was a different chicken that every dog ate. [every > a, a > every] (Reeve 2012: 46)

(24) That was a different chicken that every dog ate. [*?every > a, a > every]

さらに、vice-versa cleft (Hedberg 1990, 2013) の場合、*it* の代わりに *that* を用いると容認度が下がる。

(25) It was not John who hit Mary; it was Mary who hit John.

(26) ?That was not John who hit Mary; that was Mary who hit John.

このような *it* 分裂文と *that* 分裂文の容認度の違いを考えると、ともに分裂文に用いることができるという理由によって *it* と *that* は同様の指示性をもつとする、Hedberg (2000)、Reeve (2012, 2013) の議論には、問題があるように思われる。指定の *it* 分裂文は、WH 節の空所を焦点位置の要素で埋めるという機能をもつものである。本稿では立ち入らないが、*it* 分裂文の意味構造を、直接、倒置指定文 / *specificational sentence* と関連づけることができるならば、主語名詞句 *it* は、変項を含む命題関数を示すものとなり、非指示的であると考えなければならないことになるであろう。分裂文における *it* と *that* の意味機能上の相違については、さらに検討が必要であると思われる。

III. Predicational *it*-clefts

まず、措定の解釈をもつといわれる *it* 分裂文のうち、Declerck (1988) が ‘predicational *it*-cleft’ と分類して、考察の対象にしたタイプの *it* 分裂文を見てゆくことにする。Declerck (1988) 自身、*it* 分裂文は、基本的には指定の意味構造をもつものであることを認めているが、中には、焦点位置の名詞句によって変項の値を指定することよりも、その名詞句を修飾する predicational な要素によって対象の性質を記述することの方に重点が置かれた *it* 分裂文があると、指摘している。(27)、(28) は、指定の解釈よりも、措定の解釈の方が自然であるといわれる例である。

(27) It was an INTERESTING meeting that I went to last night.

a. I went to the following: an interesting meeting. (specificational)

b. The meeting that I went to last night was interesting. (predicational) (Declerck 1988: 166)

(28) It was an odd televised ceremony that I watched from my living room, and a touching one.

a. I watched the following from my living room: an odd televised ceremony, and a touching, one. / I watched an odd televised ceremony from my living room, and a touching one. (specificational)

b. The televised ceremony that I watched from my living room was an odd one, and a touching one. (predicational) (Hedberg 1990: 3)

Declerck (1988) がこうした *it* 分裂文を通常の指定の *it* 分裂文と区別し、predicational *it*-cleft というクラスを立てる根拠を挙げるのに対し、熊本 (2007a, 2007b)、Hartmann (2011、2016) は、これらの *it* 分裂文は、確かに、焦点名詞句の形容詞の表す情報が重要であるという特徴を有するものの、別なクラスを立てる必要はないと考える。Declerck (1988) が挙げるこれらの *it* 分裂文を措定文的とみなす根拠については、反論が可能であり、そのいくつかを以下に示すことにする。

一つは、同じ種類の *it* 分裂文を結合することはできるが、異種の *it* 分裂文をつなぐことはできないという基準に関するものである。(29) の容認度が低いのは、指定の *it* 分裂文に措定の *it* 分裂文が付け加えられているからだ、Declerck (1988) は説明する。

(29) ??It is an IMPORTANT meeting that I'm going to and JOHN who is presiding at it.

(Declerck 1988: 161)

しかし (30) は、まったく問題のない組み合わせである。

(30) It is an INTERESTING subject that is going to be discussed and (probably) JOHN who is going to lead the debate. (熊本 2007b: 127)

次に、指定の *it* 分裂文における否定は別の値が選ばれるという対比を示すのに対し、predicational *it*-cleft の場合はストレートな否定であり、値の対比を示すことはないという違いがある点を、Declerck (1988) は挙げる。

(31) a. It's not John who murdered Smith [but someone else].

b. It was not an important decision that was made yesterday. (Declerck 1988: 166)

この点については、Hartmann (2016) が、'important decision' には、例えば、'irrelevant decision' が対比されていると考えることができるのではないかと述べ、対比がはっきりと示された次のような例もあることを示している。

(32) But we are thrown a hint that his triumph is hardly long-lived, for when he stands, alone, high above the still forms of the dead below, it is *not a look of satisfaction that he throws us, but one of puzzlement at his own work.* (Hartmann 2016: 11)

もう一つは、predicational *it*-cleft の焦点位置に二つの名詞句が表れた場合に、二つの指示対象ではなく、二つの性質をもつ一つの指示対象を想定できるという点である。

(33) It is a fast player and a good defender that the club needs. (Declerck 1988: 170)

WH 分裂文 (34) は、指定としては、車とボートの二つを必要としているという解釈、措定としては、必要なものは一つで、それが車でありボートであるという二つの性質をもつ、という解釈がなされる (Higgins 1979)。

(34) What I need is a car and a boat. (Declerck 1988: 75)

しかし、想定される指示対象が一つであるからといって、必ずしも、措定の解釈をしなければならない訳ではない。(35) を見よう。

(35) a. It is a caring mother of your children and a devoted wife that you need now.

b. You need [a caring mother of your children and a devoted wife] now. (熊本 2007b: 126)

対応する動詞文 (35b) も、二つの性質をもつ一人の人が必要であると読めるのであるから、(35a) の *it* 分裂文に指定の解釈を与えることは、十分、可能であると思われる。

さらに、*be* 動詞の補語の名詞句が表す性質の対極を強調する否定辞 *no* が predicational *it*-cleft の焦点位置に現れるという点を、Declerck (1988) は挙げる。*no* は、(36) では、その数がゼロであると解釈されるのに対し、措定文 (37) では、とてもそのような性質をもつものではないという解釈がなされる。

(36) No genius would postulate such a theory.

(37) John is no genius.

次の predicational *it*-cleft は、これを書いた人は愚か者どころではないという、措定の解釈がなされると、Declerck は言う。

(38) It was no idiot who wrote this. (Declerck 1988: 180)

しかし、*no* + 名詞が、そのような性質をもたないもの、と解釈されるのは、その名詞句が叙述名詞句として機能する場合に限られない。(39) の *no idiot* も、「愚かではない人」という解釈が可能である。

(39) Certainly, no idiot planned this.

また、*no* + 名詞が *be* 動詞の後に現れているからといって、その文を措定文と解釈しなけ

ればならないわけではない。(40)のWH分裂文は、陸軍が求める人について、その人はheroなどではないと叙述する指定の解釈ではなく、陸軍はheroなどではない、ただ、良い兵士を求めているという、指定の解釈がなされる。

(40) What the army needs is no hero. / are no heroes.

同様の例として、(41)を見てみよう。

(41) It is no hero that the army needs.

a. The one the army needs—he is no hero.

b. The army needs someone who is no hero, namely, just a good soldier. (熊本 2007a: 143)

(41)の*it*分裂文も、陸軍が求める人について、その性質を叙述しているというよりも、どのような人を求めているかを指定していると読む方が、自然であろう⁶。Declerck (1988)には、他にも *predicational it-cleft* の特徴が挙げられているが、いずれも、焦点名詞句内の叙述的な情報に重点が置かれているということから、説明がつくのではないと思われる。「どれ」がではなく、「どのような性質をもつもの」が、値であるのかを指定するタイプの分裂文であり、焦点名詞句自体が叙述名詞句として機能しているということではないであろう。Reeve (2012)には、性質を示すのに用いられる *that* によって、*predicational it-cleft* の焦点名詞句を置き換えることはできないという指摘がある。

(42) A: John is a kid.

B: Yes, I believe him to be that.

(43) A: It was a kid who beat John.

B: *Yes, it was that.

(Reeve 2012: 36)

このように見てくると、*predicational it-cleft* を指定の*it*分裂文と区別して、特に別なクラスを立てる必要はないように思われる。

IV. Proverbial *it*-clefts と less proverbial *it*-clefts

ここで取り上げる *proverbial it-cleft*、*less proverbial it-cleft* は、*it* 分裂文とは全く異なる構文であるとして除外され、これまで、あまり議論の対象とならなかったものである。これらの分裂文は動詞文ではなく、以下のような指定文によってパラフレーズするのが適切であるとされる。

(44) It is a poor heart that never rejoices. (*proverbial it-cleft*)

a. A /The heart that never rejoices is a poor heart.

b. The heart that never rejoices is poor.

c. If a heart never rejoices, it is a poor heart.

(45) It is a happy mother who has such children. (*less proverbial it-cleft*)

a. A /The mother who has such children is a happy mother.

b. If a mother has such children, she is a happy mother. (Declerck 1988: 151-153)

しかし、また、Delahunty (1982) のように、*it* 分裂文の特徴である「唯一性」や「総記」を表す *only* を加えれば、いくつかの例については、動詞文との対応が可能であると考えられるものもある。

(46) a. Only a poor heart never rejoices.

b. Only an ill wind blows nobody any luck.

c. ?? Only a long road has no turning. (Delahunty 1982:17)

熊本 (2007a) は、proverbial *it*-cleft を、西山 (2003、2013) のいう「絶対存在文」⁷ と関連づけ、もしそのような値があるとすればどのような値であるのか、それを指定する文であると解釈できることを示した。

(47) If there is anything that never rejoices, it is a poor heart. / Only an exceptionally poor heart would never rejoice.

(48) If there is anything that has no turning, it is a long lane. / Only an exceptionally long lane would have no turning.

(47)、(48) の最初の文の後件が、指定と措定、どちらの読みをもつのか、これだけでは明らかではないが、(49) のような例を見れば、指定を表しているとみなすことが可能であると思われる。

(49) If there is anyone who can solve this problem, it is John / a mathematical genius.

日本語では、「曲がり角のない道はない」「誰の得にもならない風は吹かない」というような訳が与えられる。これは、指定された値がありえないものであるときに出てくる含意であると、考えることができるのではないだろうか。proverbial *it*-cleft が指定の解釈をもちうることは、明らかに指定を表す *it* 分裂文と結合された (50) のような例があることから分かる。

(50) *It may be a wise child that knows its own father, but it is a laughing child that knows its own mother.* (D. Morris, *The Naked Ape*)

(50) の二つの *it* 分裂文は、それぞれの値を対比し、強調する機能を果たしている。このように、proverbial *it*-cleft は、必ずしも措定と解釈しなければならない訳ではないと思われるが、これらは古い構文を残したものであると言われ、検討できる例も限られている。そこで、類似した構文でありながら、より多くの例を調べることができる less proverbial *it*-cleft に注目して、その意味特徴を探ることにしたい。

まず、predicational *it*-cleft、specificational *it*-cleft、less proverbial *it*-cleft の解釈を見直しておくことにしよう。

(51) It was an EXTREMELY RICH guy who proposed to her. (predicational *it*-cleft)

(52) It is an extremely rich guy who can marry her. (specificational *it*-cleft)

(53) It is a lucky guy who can marry her. (less proverbial *it*-cleft)

興味深いのは、WH 節の表す内容と、焦点名詞句の修飾語のもつ意味との関係である。(53) の指定の読みでは、彼女と結婚できるということにより、その男は幸運だと判断されることになる。これに対し、(52) は、誰が彼女と結婚できるかという、それは非常に金持ちの男だ、という指定の読みをもつ。彼女と結婚できることによって、彼が非常に金持ちだということになるのではない。そして、(51) も指定の解釈をもつといわれるが、(53) と異なり、WH 節の内容は、その男が非常に金持ちであるという判断に、直接、関わるものではない。対象が焦点名詞句の修飾語の表す性質をもつとする判断の根拠として、WH 節の内容が関わる場合に、less proverbial *it*-cleft と解釈されるという点を押さえておきたい。また、predicational *it*-cleft の WH 節は既定の事柄に言及するが、less proverbial *it*-cleft の WH 節は想定を表すという違いもある。

less proverbial *it*-cleft には、指定の *it* 分裂文とは異なる統語的な特徴がみられることが、指摘されている。Declerck (1988) は、指定の *it* 分裂文の WH 節は関係節ではないとする立場をとるが、less-proverbial *it*-cleft の WH 節は関係節であり、(45b) のパラフレーズが示すように、条件節として解釈できるものであると考える。仮定を表す場合、関係節の動詞の形は条件節に見られるものと同様であるが、指定の *it* 分裂文の動詞の形は、主節のものと合致するという。

- (54) a. If a man didn't / *wouldn't have any friends, he wouldn't be happy.
 b. A man who didn't / *wouldn't have any friends wouldn't be happy.
 c. If I were the one to decide, it would be a more interesting subject that we would be /
 *were discussing tonight. (Declerck 1988: 153)

このテストに従うと、(55) の WH 節は、仮定を表わす関係節であると判断される。

- (55) If those stones were real diamonds, it would be a happy mother who possessed / *would
 possess them. (Declerck 1988: 153)

しかしながら、実際には、less proverbial *it*-cleft とされるものでも、WH 節に過去完了形が現れない例も多い。

- (56) It would be a rare coach indeed who would expect their athletes to work at 100% 7 days/
 week, 4 weeks a month, 12 months a year. (The iWeb corpus)

WH 節に *would* が現れないということに基づいて、less proverbial *it*-cleft を指定の *it* 分裂文から区別することはできないように思われる。

また、Declerck (1988) には、less proverbial *it*-cleft の主語代名詞 *it* は、*he* / *she* / *they* で置き換えることが出来るという指摘がある。

- (57) It / He is a good divine that follows his own instructions. (Declerck 1988: 151)
 確かに、明らかな指定の *it* 分裂文の場合とは異なり、less proverbial *it*-cleft の付加疑問文においては、*he* を認める人もいる。

- (58) It is John who is in charge of this project, isn't it / *he?

(59) It is a wise professional indeed who knows his own self-interest, isn't it / he?

しかし、その一方で、次のような例においては、*he* は認められないという判断もある。

(60) A: It is a wise professional who knows his own self-interest.

B: ??Yes, he is that.

it と *he / she / they* の交替については、さらに検討が必要であると思われる。

ここで、意味解釈の観点から、これまでに指定の *it* 分裂文として挙げられた例の中には、指定の *it* 分裂文として説明できるものも少なくないことを見ておこう。Hedberg (1990) は、*rare* が、指定の読みをもつ *it* 分裂文に度々現れ、数量詞的な解釈をもたらすと指摘している⁸。例えば、(61a) は、値を指定する機能をもたず、(61b) (62c) のようにパラフレーズされるものだという。

(61) a. It's a rare man who walks to work.

b. Few men walks to work.

c. A man rarely walks to work.

(Hedberg 1990: 74)

確かに、(61a) は、(61b)、(61c) のように解釈できるが、興味深いのは、(62) のような例の存在である。

(62) It is *only a rare one* who somewhere out there both learns the craft of war and finds enough food to be strong for war. (The iWeb corpus)

さらに、(63) は、*only* が付加されているばかりでなく、焦点名詞句が定名詞句であって、形式上は指定の *it* 分裂文と判断されそうであるが、「そのような文芸紀行家はめったにいない」という解釈が可能である。

(63) It is *only the rare literary traveler* who may remark how a peoples' customs are suited to the local climate—a subject for travel essays only slightly more sophisticated than remarking on the weather itself. (L. Heschong, *Thermal Delight in Architecture*)

(63) は、珍しい文芸紀行家以外はそのようなことはしない、という意味から、WH 節の表す特徴をもつ人の少なさが、含みとして出てくるということであろうか。指定を表す形式をもつ *it* 分裂文からも同様の解釈が生じるとすると、less proverbial *it*-cleft と指定の *it* 分裂文との解釈の相違は、分かりにくいものとなる。

他方、less proverbial *it*-cleft の特徴を示す *it* 分裂文でも、動詞文によるパラフレーズの方が適切であるケースがある。

(64) a. Nowadays, in fact, it is a careless or inebriated soul indeed who sends candid emails or keeps a diary. (The iWeb corpus)

b. Nowadays, (only) a careless or inebriated soul sends candid emails or keeps a diary.

(specificational)

c. Nowadays, the soul who sends candid emails or keeps a diary is (a) careless or inebriated (soul). (predicational)

(65) a. I think it would be a rare and probably very foolhardy student here who would only apply to the state flagship. (The iWeb corpus)

b. (Only) a rare and probably very foolhardy student here would only apply to the state flagship. (specificational)

c. The student here who would only apply to the state flagship would be (a) rare and probably very foolhardy (student). (predicational)

(64a) や (65a) のように指定の解釈が可能な例がある一方で、指定の解釈だけが可能なものもある。例えば、(66) のような否定文は、[x ignores his dreams] という変項の値として提示されたものを否定しているというよりも、対象が「賢くない」という性質をもつことを述べていると解釈するほうが自然であろう。

(66) a. It is not a wise person who ignores his dreams. (The iWeb corpus)

b. The person who ignores his dreams is not (a) wise (person).

less proverbial *it*-cleft は *it* 分裂文とは別個の構文であるが、形式が同様であるために曖昧さが生じ、たまたま指定の *it* 分裂文とも解釈できるケースがある、ということであるのか、less proverbial *it*-cleft とされてきたものの中には、本質的に指定の *it* 分裂文と考えることができるものがあるということであるのか、十分に検討しなければならない。

最後に、less proverbial *it*-cleft の解釈を明らかにするために用いられる指定文によるパラフレーズには、注意が必要であることを指摘しておきたい。(67) と (68) を比較してみよう。

(67) a. It is no longer a good student who cannot solve this problem.

b. It is no longer a bad student who cannot solve this problem.

(68) a. The student who cannot solve this problem is no longer a good student.

b. The student who cannot solve this problem is no longer a bad student.

(67) では b. が、(68) では a. が、より自然であると判断される⁹。(67b) は、「これまでは、この問題が解けない学生は出来が悪いと思われていたが、最近では出来の良い学生でも解けないのだから、そういう学生は出来が悪いとは言えなくなった」という判断基準の変化、(68a) は「その学生はこれまで出来の良い学生だったが、この問題を解けないなら、もう出来の良い学生ではない」という性質の変化としての解釈が、まず、出てくるようである。(67a)、(67b) については、値の入れ替わりをいう、指定の解釈も可能であり、その場合も、(67b) の方が、表された状況を理解しやすいと思われる。(67a)、(67b) がそれぞれ、(68a)、(68b) が示す、個体の性質の変化という解釈をもちにくいということであるならば、less proverbial *it*-cleft の解釈を、単純に指定文との対応関係によって理解しようとするには、無理がある。「指定」と一口に言っても、判断基準の変化と個体の性質の変化の違いを認識しておかなければならない。

先に見たように、less proverbial *it*-cleft には、WH 節の内容が判断の根拠を示すという特徴がある。焦点名詞句内の叙述的な要素が示す特徴をもたないものは WH 節が表すよう

なことはしない、という状況が暗に対比されて、そこから、WH 節が表すようなことをするならば、焦点名詞句内の叙述的な要素が示す特徴をもつと判断され、その要素が際立つケースも少なくない。このような含みは、(45a) のような単純な指定文の形式からは生じないように思われる。less proverbial *it*-cleft を独自のクラスとして立てる必要があるかどうかという点については、パラフレーズにまつわる問題点も考慮した上で、さらに考察を深める必要があると思われる。

V. 結語

本稿では、指定の解釈をもつとされてきた predicational *it*-cleft、proverbial *it*-cleft、less proverbial *it*-cleft を取り上げ、それぞれの意味特徴を検討した。predicational *it*-cleft については、確かに焦点名詞句の叙述的な内容に重点が置かれているものではあるが、本質的に指定の *it* 分裂文であると考えることができることを示した。proverbial *it*-cleft、less proverbial *it*-cleft に関しても、そのいくつかは、指定の *it* 分裂文とみなすことによって、それらがもつ解釈を説明できることを示した。分裂文の主語代名詞の指示性に関する考察は、まだ十分ではなく、分裂文の統語的構造についても、問題が残されたままである。こうした点は、また稿を改めて論じることとしたい。

* 本稿は、2018 年 11 月 11 日、第 103 回慶應意味論・語用論研究会（於：慶應義塾大学言語文化研究所）において、「Predicational *it*-clefts と proverbial *it*-clefts」と題して行った口頭発表に、加筆・修正を行ったものである。有益な助言を下さった西山佑司先生、出席者の方々、例文のチェックをして下さった Richard Simpson 氏、Alan Bowman 氏、Jonathan Moxon 氏に謝意を表する。本研究は、平成 30 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (C)「コピュラ文の意味構造と名詞句の定性に関する研究」(課題番号：17K02684) (研究代表者：熊本千明) の助成を受けたものである。

註

1. *this*、*that* のような指示詞に導かれた分裂文ではなく、*the one* や *the thing* に導かれる (i) のようなタイプの文を、*th* 分裂文と呼ぶこともある。
(i) The thing that I like best is grape soda. (Patten 2012:7)
2. 日本語のコピュラ文に関しては、(i) の語順のものを指定文、(ii) の語順のものを倒置指定文と呼ぶが、英語のコピュラ文に関しては、(iii) の語順のものを inverted specificational sentence、(iv) の語順のものを specificational sentence と呼ぶので、注意が必要である。
(i) ジョンがリーダーだ。(指定文)
(ii) リーダーはジョンだ。(倒置指定文)
(iii) John is the leader. (inverted specificational sentence)

- (iv) The leader is John. (specificational sentence)
- the leader*, *John* を、指示的名詞句、変項名詞句、叙述名詞句のいずれと解釈するかによって、ここに挙げたもの以外の読みも出てくる。
3. Hartmann & Veenstra (2013) は、彼らの分析を、‘*it*-as subject analysis’ と呼んでいる。
 4. 他方、extraposition approach では、PP が焦点位置に来た場合に、主語名詞句との対応関係をどのように示すかが問題となる。
 - (i) a. It was TO JOHN that I spoke.
 - b. *The one that /Who I spoke was to John. (Hartmann and Veenstra 2013: 11)

また、vice-versa cleft (Hedberg 1990, 2013) も、specificational sentence の形では言い換えられないものであろう。

 - (i) a. It's not John that shot Mary. It's Mary that shot John. (Hedberg 2013: 239)
 - (ii) b. The one who shot Mary was not John. The one who shot John was Mary.
 5. specificational sentence を、equative sentence と呼ぶ場合がある。
 6. 熊本 (2007a) では、*look for*、*want*、*need* など、不定名詞句の非特定の解釈を可能にする動詞が現れる文脈において、*no* + 名詞は叙述名詞句ではなく、そのような特性をもつ対象を指す指示的名詞句として用いることが出来るという観察を示し、そこには一種のメタ的な用法が見られることを指摘した。
 7. 絶対存在文とは、個体が空間的な場所に存在する / しないことを主張するのではなく、[...x...] という命題関数の値の有無、多少を述べるタイプの存在文である。
 - (i) a. 100m を 3 秒で走ることができるひとはいない。
 - b. [x が 100m を 3 秒で走ることができるひとである]
 - c. 誰も 100m を 3 秒で走ることはいできない。 (西山 2013: 254)
 8. 熊本 (1994) では、(61a) のタイプの *it* 分裂文は、値のあり方を述べるものであるとし、「値関係文」と呼んで、指定文との関わりを指摘した。
 9. おかしな問題なので、解けない方が理解が進んでいることを示す、というような状況も、不自然ながら、考えることができる。

参考文献

- Ball, C. N (1977) ‘Th-clefts.’ *Pennsylvania Review of Linguistics* 2, 57-69.
- Birner, B. J., J. P. Kaplan and G. Ward, (2007) ‘Functional compositionality and the interaction of discourse constraints.’ *Language* 83, 317-343.
- Declerck, R. (1988) *Studies on Copular Sentences, Clefts and Pseudo-Clefts*. Leuven: Leuven University Press.
- Delahunty, G. (1982) *Topics in the Syntax and Semantics of English Cleft Sentences*. Bloomington: Indiana University Linguistics Club.
- Hartmann, K. and T. Veenstra (2013) ‘Introduction.’ In: K. Hartmann and T. Veenstra (eds) *Cleft Structures*, 1-32. Amsterdam / Philadelphia: John Benjamins.
- Hartmann, M. J. (2011) ‘Focus, predication and specification: The case of *it*-clefts.’ Invited Talk: CRISSP Seminar, November 28, 2011, Hogeschool-Universiteit Brussel)

- Hartmann, M. J. (2016) 'Apparent predication clefts.' A paper read at the International workshop on non-prototypical clefts, KU Leuven.
- Hedberg, N. (1990) *Discourse Pragmatics and Cleft Sentences in English*. Ph. D. diss., University of Minnesota.
- Hedberg, N. (2000) 'The referential status of clefts.' *Language* 76 (4), 891-919.
- Hedberg, N. (2013) 'Multiple focus and cleft sentences.' In: K. Hartmann and T. Veenstra (eds) *Cleft Structures*, 228-250. Amsterdam / Philadelphia: John Benjamins.
- Higgins, R. F. (1979) *The Pseudo-cleft Construction in English*. New York: Garland.
- Horn, L. R. (2016) 'Information structure and the landscape of (non-) at issue meaning.' In C. Féry and S. Ishihara (eds) *The Oxford Handbook of Information Structure*, 108-127. New York / Oxford: Oxford University Press.
- Jespersen, O. (1927) *A Modern English Grammar* 3. London: Allen and Unwin.
- Jespersen, O. (1937) *Analytic Syntax*. London: Allen and Unwin.
- 熊本千明 (1994) 「It-cleft の解釈をめぐる -Specificational・Predicational 以外の解釈の可能性-」『佐賀大学英文学研究』第 22 号, 17-36.
- 熊本千明 (2007a) 「It-cleft の措定の読みについて (1)」『佐賀大学文化教育学部研究論文集』第 11 集第 2 号, 139-146.
- 熊本千明 (2007b) 「It-cleft の措定の読みについて (2)」『佐賀大学文化教育学部研究論文集』第 12 集第 1 号, 123-130.
- Kumamoto, C. (2012) 'Referentiality of the pronouns *it* and *that* in copular sentences.' *Discourse and Interaction* 5 (2), 35-50.
- 熊本千明 (2014) 「指定文・措定文・同一性文」『佐賀大学全学教育機構紀要』第 2 号, 1-13.
- Mikkelsen, L. (2005) *Copular Clauses: Specification, Predication, and Equation*. Amsterdam / Philadelphia: John Benjamins.
- 西山佑司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論』東京: ひつじ書房.
- 西山佑司・編 (2013) 『名詞句の世界』東京: ひつじ書房.
- Patten, A. L. (2012) *The English It-Cleft*. Berlin / Boston: Mouton de Gruyter.
- Prince, E. F. (1978) 'A comparison of wh-clefts and it clefts in discourse.' *Language* 54 (4), 883-906.
- Reeve, M. (2012) *Clefts and their Relatives*. Amsterdam / Philadelphia: John Benjamins.
- Reeve, M. (2013) 'The cleft pronoun and cleft clause in English. In: K. Hartmann and T. Veenstra (eds) *Cleft Structures*, 165-185. Amsterdam / Philadelphia: John Benjamins.
- 資料
- Davies, M. (2018) The iWeb corpus. Brigham Young University. <https://corpus.byu.edu/iweb>
- Morris, D. *The Naked Ape*
- Heschong, L. *Thermal Delight in Architecture*